

タマネギベと病の発生に注意しましょう！

1 発生状況

3月上旬に県内6地点で行った調査において、タマネギベと病（一次感染株）の発生が多い状況です。発生ほ場率は66.7%と高く、平年の2倍の発生となっています。

一次感染株で形成された分生胞子が飛散し、二次感染を起こすため、今後の発生拡大に注意が必要です。

また、気象庁の1か月予報（3月15日～4月14日）によると、気温が高い確率は40%、降水量が多い確率は40%であり、これらの条件は本病の発生を助長する可能性があります。

以下の防除対策を参考にして、本病の発生拡大を防止しましょう。

2 症状と発生生態

① 一次感染株 》現在、ほ場で発病が確認されている株

【病 徴】：草丈が低く、葉が外に湾曲し、やや黄化（写真1）

葉身上に灰色～灰褐色の多数の分生胞子を形成

【感染源】：苗床や定植後のほ場に残った残さや土壌中の病原菌

【感染時期】：11～12月



② 二次感染株 》今後、発生の拡大が懸念される株

【病 徴】：葉身に黄色で大型の長卵形～楕円形をした病斑を形成（写真2）

【感染源】：一次感染株に形成された分生胞子（写真3）

【感染時期】：3～5月



分生胞子による感染と発病を繰り返す



写真1 一次感染株



写真2 二次感染株



写真3 分生胞子

3 防除対策

- ・感染前から予防効果のある薬剤を散布する（表1）。
- ・発生を認めた場合には速やかに抜き取り、直ちに治療効果のある薬剤を散布する（表1）。
なお、抜き取った発病株は伝染源となるため、ほ場外で適切に処分する。
- ・薬剤感受性低下を防ぐため、FRACコードの異なる薬剤のローテーション散布に努める。
- ・前年、発生が多かったほ場では、発生が増えるおそれがあるので、特に注意してほ場を観察する。
- ・ほ場の排水が悪いと発病が助長されるため、排水対策を徹底する。

表1 タマネギべと病に登録のある主な薬剤（令和7（2025）年3月14日現在）

効果 (目安)	農薬名	希釈倍数 (倍)	使用時期	本剤の 使用回数	FRAC コード	有効成分	有効成分の 総使用回数
予防	ジマンダイセン水和剤	400～600	収穫3日前まで	5回以内	M3	マンゼブ	5回以内
	M I Cベンコゼブ水和剤	400～600	収穫3日前まで	5回以内	M3	マンゼブ	5回以内
	ドーシャスフロアブル	1000	収穫7日前まで	4回以内	M5	T P N	6回以内
					21	シアソファミド	4回以内
	フロンサイドS C	1000～ 2000	収穫3日前まで	5回以内	29	フルアジナム	7回以内 ¹⁾
	ピシロックフロアブル ²⁾	1000	収穫前日まで	3回以内	U17	ピカルブトラゾクス	3回以内
予防・ 治療	リドミルゴールドM Z	500～ 1000	収穫7日前まで	3回以内	M3	マンゼブ	5回以内
					M4	メタラキシルM	4回以内 ³⁾
	プロポーズ顆粒水和剤	1000	収穫7日前まで	3回以内	M5	T P N	6回以内
					40	ベンチアパリカルブイソプロピル	3回以内
	ダイナモ顆粒水和剤	2000	収穫3日前まで	3回以内	21	アミスルブロム	3回以内
					27	シモキサニル	3回以内
	ザンブロDMフロアブル	1500～ 2000	収穫7日前まで	3回以内	45	アメトクトラジン	3回以内
					40	ジメトモルフ	3回以内
	ジャストフィットフロアブル	3000	収穫7日前まで	3回以内	43	フルオピコリド	3回以内
					40	ベンチアパリカルブイソプロピル	3回以内
	ホライズンドライフロアブル	2500	収穫3日前まで	3回以内	27	シモキサニル	3回以内
					11	ファモキサドン	3回以内
	オロンディスウルトラS C	2000	収穫前日まで	2回以内	49	オキサチアピプロリン	2回以内
					40	マンジプロパミド	2回以内

1)：全面土壌混和は1回以内、苗根部浸漬は1回以内、散布は5回以内

2)：適用作物は鱗茎類

3)：種子への処理は1回以内、は種後は3回以内

- ・詳細は、農業総合研究センター（Tel 028-665-1244）までお問合せ下さい。
- ・病虫害情報発表のお知らせは「農政部X（旧ツイッター）（@tochigi_nousei）」、
- ・栃木県農業総合研究センターホームページ（<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/>）でもご覧になれます。

